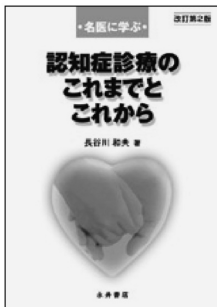


## ■ 書 評



名医に学ぶ認知症診療の  
これまでとこれから 第2版

長谷川和夫 著  
永井書店 2011年1月  
141頁, 定価 2,940円

本書は、第一章「物語の始まり」として1901年のオーガステDの入院をアルツハイマーが担当したことを書き出しとし、最終章「認知症対策のこれから」として、認知症サポーターの紹介から、町づくり、国づくりにまで言及し、認知症ケアに関するホームページの紹介でその稿を終えている。

その内容であるが、著者によって開発された長谷川式認知症スケールの成り立ちから改訂に至る一連の流れについて解説し、アルツハイマー病をはじめとする認知症の診断や治療など、認知症に関連する項目について網羅的にわかりやすくまとめた記載がなされている。また第2版としての改訂において、最近の時代的な変化に対応し、介護保険の改正や（トム・キットウッドが提唱した）パーソンセンタードケア、センター方式の普及などを詳しく紹介するなど、認知症治療のみならずそのケアに関係する現場に留意した内容になっている。治療者に対しても単なる疾患対応ではなく、患者さん中心の治療やケアを心がける必要性を説き、高木兼寛の「病気を見ずして病人を見よ」という医療に取り組む際の原点となる考え方に立脚している。

本書には5つのエッセイが織り込まれており、認知症の患者さんの詩を紹介するくだりを通じて、『認知症のもつ人の心の不安や痛みを理解する心が第一に大切であることを強調したい』と書かれ

ている。このように認知症の内的体験やこころの痛みを理解することの必要性を述べ、かけがえない存在の尊厳を支えるケアについてわかりやすい実例を紹介しつつ解説している。また本書の最後のパラグラフでは認知症介護研究・研修センターの共通理念が紹介されている。その理念とは、「認知症になっても『心』は生きています、認知症の人の『その人らしさ』を大切にできるケアを目指していきます、そして、認知症の人が『尊厳』を支えられてともに暮らしていける社会の創造を目指します」とある。これらの言葉には著者の最も伝えたいことが凝縮していると感じられた。評者の個人的な感想として、画家のウィリアム・ウテルモーレンがアルツハイマー病に罹患した後もその自画像で自身の不安や恐怖・悲しみ・怒りなどの心理状態を表現したという話が心に浮かんだが、当事者からの何らかの表現を受け止めることで認知症の内面を理解することが大切であることを改めて実感した。

改めて序文を読み返してみると『認知症の人の物語を聴く時間をもつことが第一でしょう。心理療法的アプローチや生活指導を取り入れることです。これには多くの課題がありますが、それを一つひとつ解決していく工夫や対策を考えていくことです』とある。本書は認知症以外の精神疾患の診療においても適用可能な内容を含みつつ、他方では一般の精神疾患での有用な診療技法を認知症の診療に応用することも提案されているように思われた。また認知症の基本的な知識から実際の診療のために必要な内容を述べる中で今後に向けての課題点を提示しており、読者の一人一人の工夫や対策が加えられることで認知症診療の進歩に繋がることが期待される。以上、これまで認知症診療に携わってきた方にも、そしてこれから認知症診療に携わる方に勧められる一冊であると言える。

(谷井 久志)